

東アフリカの舞踊と音楽

～ケニアを中心として

立命館大学 遠藤 保子

1 研究目的・対象

伝統的な文化・社会が無視され、欧州によって国境線が引かれたアフリカの国々において国立舞踊団とは何を意味しているのかを考察する。ケニアのボーマス・オブ・ケニア（国立舞踊団）を対象に、ケニアで文化人類学的なフィールドワーク（2001年5月～2002年12月）を行なった。

2 ボーマス・オブ・ケニア

ボーマス・オブ・ケニアは、ナイロビの中心部から10kmの位置にあり、すり鉢式の劇場、レストラン、練習場等がある。1973年、ボーマス・オブ・ケニアは諸外国の観光客から外貨獲得のために創設され、現在では観光・情報省によって管理・運営されている。設立当初は、外国人観光客の文化的娯楽を提供するために存在していたが、今日では地元の人々の文化的娯楽としても毎日上演されている。専属団員になるには、3ヶ月～6ヶ月の見習生をへて、実技のテストに合格しなければならない。団員数は、60名（02年現在）である。

練習は、伝統的な舞踊動作を中心に行い、楽器の生演奏とともに舞踊演目とおして練習することが多い。ケニアの教育制度は英国の影響をうけているが、舞踊の練習には英国の舞踊メソッドは反映されていない。上演演目は、多様な地域の舞踊を網羅することが建前となっているが、一番多く踊られる舞踊は、バンツ語系、次にナイル語系、最後にクシ語系（2演目程度）になっている。その中でも最も代表的な舞踊は、T.O. ブウェリ（マネージャー）によると、1、ゴンダ（ギリヤマ族、結婚式の舞踊：バンツ語系）、2、オルト（ルオ族、結婚式の舞踊：ナイル語系）、3、スクティ（ルヤ族、葬式の舞踊：バンツ語系）、4、サンプル（サンプル族、戦争の舞踊：ナイル語系）、5、センゲンヤ（ディゴ族、結婚式及び葬式の舞踊：バンツ語系）、6、キクユ（キクユ族、割礼の舞踊：バンツ語系）である。

3 考察

上記の6つの舞踊特性は次の4点が指摘できる。

- 1 外国人観光客の文化的娯楽としての舞踊であり、宗教的な意味は考えられない。
- 2 舞踊のテクニクを追及し、舞踊劇にする等さまざまな演出が加えられている。
- 3 舞踊動作は、エスニック・グループの生業形態や自然環境等とかかわっている。
- 4 短い主題のフレーズを何度も反復する。

現在のボーマス・オブ・ケニアの舞踊には、コマーシャルリズムと娯楽性の他に旧宗主国（英国）に対する憎悪、反発、抵抗を表現することがない。大澤真幸（1996）は、フィリピンの事例をもとに英語で自己を表現するという屈折した依存関係が旧宗主国に対する憎しみがないと指摘しているが、ケニアについても援用できると思われる。さらに筆者は、キリスト教に改宗したケニアの人々は、キリスト教の規範によって生活・行動することによっても反英感情が生まれにくくなると考えている。

次に、ナショナリズムと舞踊（芸術）について、アントニー・スミス（1998：135）は、次のように指摘する。ナショナリズムの言語や象徴性は、イデオロギーやイデオロギー運動よりも広範囲であり、しばしばスローガン、象徴、儀式をとおして、そのイデオロギーを集団の広範囲におよぶ大衆感情に結びつけ、ナショナリストは、ネイションを記念し、絵画、音楽、オペラ、バレエなどの芸術媒体や様式の劇的で創造的な可能性にひきつけられる。こうした様式を通じて、ナショナリストの芸術家は、感情的にネイションの背景、音、イメージを具体的に細部にわたって「再構築」するだろう、と。スミスの指摘を援用してケニアの舞踊を検討すれば、ケニアも創造されたトライバルネイションであり、重要な表現媒体である舞踊をして国のアイデンティティを感情的に訴え、国のイメージを構築しているのではなかろうか。さらに、アーネスト・ゲルナー（2000：98-99）は言う：社会はもはや宗教的象徴を通して自らを崇拜したりはしない。近代的文化は不朽不滅で再確立しうるものとして信じこんでいる民俗文化から拝借した歌や踊りを通して自らを崇拜しているのである、と。ゲルナーが指摘するようにケニアでも、伝統舞踊を借用した芸術舞踊を通して、自らを崇拜するとも考えられるのではないだろうか。

調査研究は、ケニアの関係機関と研究協力者の協力、日本学術振興会の助成金で行うことが可能になりました。心から御礼を申しあげます。

参考・引用文献

- アーネスト・ゲルナー 加藤節監訳2000『民族とナショナリズム』岩波書店 東京
 大澤真幸1996「ネイションとエスニシティ」井上俊也編『現代社会学24 民俗・国家・エスニシティ』岩波書店 東京 pp.27-66
 アントニー・スミス 高柳先男訳1998『ナショナリズムの生命力』昌文社 東京